日本書紀第二十

敏達天皇

逸

太政官文庫
和書門 特別 類
三二〇九九 號
茅卒音 函
架
三二 冊

内閣文庫
番號 和 32099
冊數 32（22）
函號 特 55 12

共卅二

日本書紀巻第二十

渟中倉太珠敷天皇　敏達天皇

渟中倉太珠敷天皇ハ。天國排開廣庭天皇
の第二の皇子にてわたらせ給ふみこなり。母を
石姫皇后とまうしき。いしひめの皇后ハ。武小廣國押盾天皇のむすめなり。
天皇佛法を信じ給はずして。文史をこの
ミ給ふ。二十九年。立て皇太子となり給ふ。
三十二年四月天國排開廣庭天皇崩
元年夏四月みづのえさるの朔。きのえいぬの

紅葉山本

国立公文書館
National Archives of Japan

日。皇太子あまつひつぎしろしめしぬ。皇后を
あがめとして。皇太后とまうす。そこの月百済の
大井に宮つくりて。また物部弓削守屋大連を
もとの大連となし。故のごとく蘇我馬子宿禰
をもて大臣となし給ふ。
又五月みづのえとら乃朔の日。天皇皇子と
大臣とにとひ給はく。高麗の使人
いまいづくにかあるぞ。大臣こたへまつ
りてまうさく。相楽乃館にはんべると

まうすを。天皇きこしめしていといたみ給ひて
はなはだしくうれへさせ給ひ。みおもてかはりて歎て
のたまはく。かなしきかなこの使人どもを
すでに先考天皇にきこしめさせりとて。群
臣を相楽乃館にまかりてさゝげたてまつれる
ものゝかずとりしるして京師におくらし
む。ひのえたつの日。天皇高麗の表疏を
とりて。大臣にさづけ。諸史をめしつどへて
よみとかしむ。この時に諸史三日乃うちに

みかえよまはさりしに船史祖王辰爾なむよくよみとき
よくよみときたてまつりしかはいたくほめ給ひて
天皇大臣ともにほめたまひてのたまはく
勅すらく辰爾よいそしきかな辰爾汝もし学ふことの
いそしからすはたれかよくよみときえん今より
殿中にちかくはへらへとてすなはち
して東西の諸史にみことのりしてのたまはく
汝等ならひし業なにゆへにかいたらさる
汝等おほしといへとも辰爾にしかすと及
高麗よりたてまつれる表疏烏羽にかけり
文字羽の黒きにまきれてたれもよみえさりけるを
辰爾これを飯の気にむして
帛をとりて羽におしあてその字をうつし
けり朝廷ことことくあやしみ給ふ
六月高麗大使副使等にかたりていはく
磯城嶋天皇の時汝等吾かはかりしことをたかへ
ぬへく他にあさむかれみたりに国の調
とられてやらかし国たるへしとあり

なりけるに汝等かおやはまさにおほさらんやそ
れより我国王なくしてさはかしとも汝等
誅つかうまつらんと副使にいひつけおはしぬ
ありにけるかくらし音楽国にいらん時大
わう吾をやまう城をみるし侍らず是
きかしき事なりひそかにころしてその口
とめんと思ふりこのよしをしりぬ
大使はも城さしよりて衣帯とそえひして
むかうきつかれ鉞のあいちにたてて

むかへしりぞくる時に賊一人まいりて杖をもて
ついてかしらまで大使の冠をうちて退ぬ次に
賊一人まいりてなぐに大使にむかひて冠を
とりおとしてさて退ぬ大使なほいかりて
地に立なから面の血をのごふまに賊一人まいり
なか刀をとりてぬいしにさしよりて大使の腹を
さして退ぬこの時大使おそれまて地によりく
おもかり後に賊一人もなりてとてにけり
なるかゆゑあくびおしらぬ領客東漢坂上直

子麻呂等その故人とかへらふ副使ホと
かく偽りていはく天皇
妻を大使にたまひしを大使みことのりに
そむいてうけず。ゐやなきこと甚だしく
故に臣等天皇のみためにころせりと有
うちを司礼をもてはうぶりぬ
秋七月高麗の使人まかりかへりぬ
太歳みづのえ辰
二年夏五月丙のえとらの朔つちのえたつ

の日高麗の使ひと越海の岸にとまりて船
破れておほれ死ぬるものおほし朝庭猜
しば〳〵みちにまよふとうたがひて饗
せずしてかへしはなつ。よりて吉備の
海部直難波にみことのりして高麗使を
おくらしむ
秋七月きのとうしの朔越海のほとりに
難波と高麗の使等とあひはかりて送使
難波が船人大嶋首磐日と狭丘首間狭と

国立公文書館
National Archives of Japan

ともにある高麗の使乃船に乗しめ高麗の
二の人ともに遣唐使の船に乗しめかくのごと
きゝめしは乗てとくかへしましにける
なくもろともに發船して牧里ゆゝめい
ぬめり遣唐使難波とかゝ他波浪とおそれしく
高麗の二人とうしなく海にかけ入つ
八月きのえとらの朔のとれいつの日
遣使難波まゐりくりてかへりしと海らし
ぬまゐりけく海乃うらに鯨魚おほくうかひ

来て唐にある船と檝櫂とそなへて難波
等邑の船とのもんことをそれて江海に入
ると海らるを天皇たちしめしてその津
あらりしと然志らしめして宮に班使て迷に
接待しくさせたまふ
三年夏六月かのえとらの朔きのえねの日
高麗のつかひ越海の岸にとまれり
秋七月つちのとゐの朔つちのえこ
らの日高麗のつかひ京に入くまうして海

さく臣等（やつこら）去年（こそ）送使（とうつかひ）にあひしたかひて國に
まかりかへる臣等（やつこら）さきに蕃（くに）にいたりぬ
臣蕃（やつこくに）すなはち使人（つかひ）の礼にならへて大嶋（おほしまの）
首磐日（おふといはひ）らをいやまひあへ給ふ高麗國王（こまのくにのこきし）さ
ことにあつく礼（いやまひ）をあつくしてもてなしたまふ
しかるにしかるに送使（とうつかひ）の船いまにいたら
すいまことさらにつゝしんて故（かれ）まさにつゝしんて使
人并磐日等（いはひら）をまうさしむ臣（やつこ）かつかひのきたら
さるこゝろをとひうけたまはらんとまうすと
天皇（すめらみこと）きこしめしてすなはち難波かつみをかそへは
なんちくにのつかひにあさむきて朝庭（みかと）をあさむく
これ一つにはとなりのつかひをしつめてのつみ
しかるはそれ二つには大使（つかひ）をころす
ゆるしつかはさんとかくにそのつみ
とゝめたまふ
冬十月つちのえねのついたちひのえさるの日蘇（そ）
我馬子大臣（うのむまこのおほおみ）を吉備國（きひのくに）につかはして白猪（しらゐ）
の屯倉（みやけ）と田部（たへ）とをましてたまふ即ち田部（たへ）の名

籍をもて白猪の史膽津にさづけ給ふつち
のえいぬの日船史王辰爾が弟牛にみことのり
して姓をたまひて津史となされ
十一月新羅より使まうしてみつきた
てまつる
四年春正月ひのえたつ朔きのえねの日
息長真手王のむすめ広姫をたてゝ皇后
となし給ふ一男二女を生ませりその一を
押坂彦人大兄皇子（麻呂古皇子）と申しきその

二を逆登皇女と申しきその三を菟道磯
津貝皇女と申しきこの月一夫人を立た
まふ春日臣仲君のむすめ老女君夫人（薬君娘也）
と申しき三男一女を生ませりその一
を難波皇子と申しきその二を春日皇子
と申しきその三を桑田皇女と申しきその
四を大派皇子と申しき次に采女伊勢大鹿
首小熊のむすめ菟名子夫人と申しき大
姫皇女（桜井皇女）と糠手姫皇女（田村皇女）

とと生まり給ふ。
二月みづのえたつの朔日。馬子宿祢大臣
京師にかへりこぬ。屯倉の事をかへりこと
まうして。きのとうしの日。百済より使をたて
みつきをたてまつる事多に恒歳より
まされり。天皇新羅のいまだ任那をたてさる
ゆへに皇子と大臣とにみことのりして
のたまはく。任那の事なおこたりそ
夏四月きのとのとりの朔かのえとらの日。
吉士金子とまうして新羅に使し吉士
木蓮子を任那につかはし。吉士訳語彦を
百済に使し給。
六月新羅より使をつかはしてみつきたて
まつる。多に常例にまされり。并て多々
羅。須奈羅。和陀。発鬼。四邑のみつきたて
まつる。ことし卜者に命して海部王の家地
と絲井王の家地とをうらなはしむ。襲吉なり
なりぬ。つゐに宮を訳語田にたてらる

まほらまにを幸玉宮としまうしき
冬十一月皇后広姫みうせ給ふ
五年春三月つちのとうの朔つちのえ
ねの日有司皇后を立給へとまうしき
みことのりして豊御食炊屋姫尊をたてて
きさきとし給ふ是ふたはしらの男いつ
はしらのひめみこを生ます其の一を菟道
貝鮹皇女 又の名は菟道磯津貝皇女とまうしき是東
宮聖徳にあはし給ふその二を竹田皇子

とまうしきその三を小墾田皇女とまうしき
是彦人大兄皇子にみあはし給ふその四を
鸕鶿守皇女 又の名は軽守皇女 とまうしきその五をお
はりのみことまうしきその六を田眼皇女と
まうしき是は息長足日広額天皇に嫁
し給ふその七を桜井弓張皇女とまうしき
六年春二月きのえたつの朔の日みことのりし
て日祀部私部をおかる
夏五月みつのとのとりの朔ひのとのうし

乃日大別王と小黒吉士と遣はして百済
のくに乃宰とし
王人命をうけたまはりてつかひとなり
て三韓につかはし自称て宰となるといふ
韓を宰たりといへるはいにしへの典なるかし
に使をいふも始みえしにかへし大別王
はおもてにはつかふなれ
冬十一月かのえさるの朔日百済国王
かへりつかひ大別王等につけて経論そこは
くまき并律師ぜんじ比丘尼呪禁師造
佛工てらたくみ六人をたてまつれり并
に難波の大別王寺にはべらしむ
七年春三月つちのえいぬの朔みつのえさ
るの日菟道乃ひめみこをもて伊勢乃祠に
はんべらしむすなはち池辺皇子にをかされし
事あらはれてとけぬ
八年冬十月新羅より枳叱政奈末つかはし
てみつきたてまつり并仏像おくりて

まゐれり。
九年夏六月新羅より安刀奈末失消奈末
來まうでしにみつきたてまつれるをうけ
たまはずしてかへしつかはしてき。
十年春閏二月蝦夷数千辺境にあたをなし
ぬ。これによりてその魁帥綾糟ら
をめしてみことのりしてのたまはく、なんぢ
らえみしは大足彦天皇の世に
ころすべきものはころし、ゆるすべき
ものをはゆるされき。今朕かの先例によりて
もとのあしきものをころさんとなりけ
れは、綾糟らたちまちにおそれかしこまりて
泊瀬の中流にくたりて三諸岳にむかひ
みつをすゝりてちかひていはく、臣等
蝦夷いまよりのちは子孫古語に生児八十綿連といふ
いさきよくあきらけき心をもて
天闕につかへまつらん。臣等もしちかひにたかは
ゞ天地諸神とまた天皇のみたま臣のたねを

奴等をなむせられける
十一年冬十月新羅より安刀奈末失消奈末
を調まゐらしゝかども[illegible]おさめ
ずしてかへし給
十二年秋七月丁のとりの朔日みことのり
のたまはく我先考天皇の世にあたりて
なむ新羅より内官家の國をほろぼせり
天國排開廣庭天皇二十三年任那新
羅のためにほろぼさる故云新羅我内官

家をほろぼせりといふ
先考天皇任那をかへさむとはかり給へ
るにはたさずしてかくれましゝかばそのこゝろざし
をとげさせ給はず朕まさに神謀をたすけ
たてまつりて任那をたてんとおもふ
今百濟にある火葦北國造阿利斯登
が子達率日羅さかしくていさみあり
故朕その人とあひはからんとおもふすなはち
紀國造押勝と吉備海部直羽嶋とを遣して

ちく百済によらしむ
冬十月紀国造押勝等くだらよりかへりまうでて
朝にかへりことまうしていはく百済国主
日羅をおしみてゆるしまゐらせず
是歳また吉備海部直羽嶋をつかはし
て日羅をめさしむ羽嶋百済にいたりて
百済にいたりて先私に日羅をみんとた
ちかひて家のかたはらにゐたりしかは
しばらくありて家のうちより韓婦出

きたりて韓語をもていはく汝か根を
我根のうちに入よといひてすなはち入ぬ
羽嶋すなはちそのこゝろをさとりて後にゆ
きて入るに日羅まうでむかへて手をとりて座
にすゑてひそかにつけていはく僕ひそ
かにきく百済国主天朝をうたがひまつりて
僕をたてまつりてのちとゞめてかへしたまはじ
とおしみておもへりこのゆへにおしんでま
ゐらせずいまつゝしみて勅をのたまはゞ

しく檻父とあらりしにさうりみぬりけるを
為しと羽嶋をかへし使のぬりらのまゝに日
羅哉よぶらつみ百済國主天朝にたてまつりしこ
まりみことのりにしたがひ奉りし日羅恩率
徳爾余怒奇奴知参官柁師徳率次干徳
水手なとそこばくの人とまうし來る日羅は
吉備兒嶋の屯倉に移されて朝庭大伴
糠手子連を遣はしてなぐさめねぎらはれし
むまた大夫等を使として難波の館にまうで

しゝ日羅をとはしむこの時日羅甲をきる
にのりてみかどの御かどにいたりて館の
前にまうでゝ進退てたゆたひなげきうらみ
ていはく檜隈宮にあめのしたしろしめしゝ
天皇のみよに我君大伴金村大連
家の奉為に海表に使して火葦
北國の造刑部靱部阿利斯登の子
臣達率日羅天皇のめしをうけたま
はりてかしこまりてまうで来ましし

本
朔

御うしろみとなりて也その甲をぬいて天皇に
奉りける也館を阿斗桑市に
作りて日羅をとゝめしめ給ふ供給
のまにまにくはしくしける又阿倍目臣物部
贄子の連大伴の糠手子の連と
御まつりことの事を日羅にとはしむ
日羅こたへて申さく天皇天下をおさめ
給ふまつりことの要は黎民をまもり
やしなひてこそなんそとこしへに兵

をおこしてかへりてうしなひほろほさん
かるかゆへに今議せん人みなつかへまつる
しめは臣連二造二造とはくにのみやつことものみやつこ下は百姓
まてあまねくみなとみさかへてともしき事な
からしめんかくのことくなる事三年
食たりあまり兵ありあまれはよろこひて
民をつかひ水火をもはゝからすおなしく
国の難をうれへしめてのち多く船舶
をつくりて津ことにつらねて客人

にみをしめうしらせあまたをそまらし城みさき
しめ志うらしこゆきて女ちら詰使(こうてい)とつて百(く)
済(たら)み使しこゆうの国王(くまのこきし)城よりしめり渡り
こまいうの太佐平まろ等(ぢしいろう)とゝいてまうこ
おもすかもちことのたゝしうまはくうしこ志
ゐうふとはみせこゆ援りつゝはとつる人
し文まうして渡しきく百済(くたら)の人こゝう
あまくいてつく船(ふね)三百あまり龍集(つうら)とこひし
うさんとたもふとりそれ渡しとり

詔(こひ)ありさふらひしくにたまひてたまはりまゐらし
志うふいとぬき地百済よりあつかぬり
国(いへ)とほくはなれしとたかりいこゆまかたはせん女人(めのこ)
小子(ちいさ)なるとしこゆ船みの場より国家(みかと)まで渡して
はんこの時にのぞみてき役(ゆさ)けはしに多(ひさ)小
伏兵(うつはもの)をひきゐて渡りける城郭(うるい)にこもりまへ
かくあまくかあさむかりきたゐて要害(ぬ)の所こと
み墨塞(そこ)をつくるまへと渡りまちてけり忠(てん)
宰(きゃうけん)旧本小忠宰とりて一人りしまん
率参宦らもん城りく一人やとらなちら

是によりて還る時本のくにゝひそかに徳爾
等にかたりていはく吾はつくしをすぎん許
なりて汝等ひそかに日羅をころさば
吾はくはしく王にまうして高爵を
あたへん身およひ妻子さかへを後にのこさん
と徳爾余奴みなゆるしつ参官等は遂に
血鹿よりみちたちしてけり日羅桑市村より
難波の館にうつりけり徳爾等ひるよる
はかりてころさんとする時日羅身

の光り焔のごとくありけるによりて徳爾
等おそれてころさゞりけるに十二月の晦に
光のうせたるをうかゞひてころしつ日羅又
よみがへりていはく是我駈使奴等が
しわざなり新羅にあらじといひて
死ぬ（この時にあたりて新羅の使きたり故しかいへり）天皇贄子大連糠
手子連にみことのりして小郡の西畔丘前に
おさめしむその妻子水手等をば石川
にをらしむしかして大伴糠手子連

且ていはゞ是一処につどへ、らんなるせはおそ
雖もしその後となりん、すなはち他妻子をと
て石川の百済のむらにらん隠しに水尾ホ
といふ石川乃大伴の村よりんへうしし送介ホと
らし(こそ)下百済河田村にもよへて故の大史伝
まらして其の事とりんげへこうしも送介ホ
侍ことにぬし(こそ)海うちく海とおり見る
恵萃参官らとしへて揚らし、ゆかなるが償ホ
人の下につらまつりてえさがらだれよ

よく獄にてらし(こそ)みえしにくりし海り
とすらの他使と葦小にまかして也ま称
是日羅のやうしとよびて送介等ゆらいこそ
情のまゝに陽さしぬ此時葦小の君ホら
昔くみかころし(こそ)深喜嶋にとてつ（深喜嶋は……嶋之）
日羅と葦小によらりぬもりみちに海畔の
ひとしく恵萃が船も風にあひて海よ
いりおくるる参官が船は津嶋にいそしいてとを
なき他こらしゆくくゝろ元をゆらりしと

十三年春二月かのとのみ北朔かのえ子の
日、難波吉士木蓮子をまうして新羅に
使とし、つゐに任那にゆく。
秋九月百済よりきたれる鹿深臣〈名字もらせり〉
弥勒石像一躯をもてり、佐伯連〈名字もらせり〉
仏像一躯をもてり。このとし蘇我馬子宿
禰そのほとけのみかた二はしらを請て、
すなはち鞍部村主司馬達等池
辺直氷田とをつかはしておこなひ人を〈修行者〉
とめもとめしむ。こゝにひとりはりまの国
に僧の還俗者あるは高麗の恵便といふをえて
大臣これをもちて師として、司馬達等のむす
め嶋を度せしむ。善信尼といふ。又善信
尼の弟子ふたり度せしむ。その一人は漢人夜
菩がむすめ豊女なり、禅蔵尼といふ。そ
の二は錦織壺がむすめ石女なり、恵善尼
といふ。馬子ひとりほとけのみのりのまゝ
にみつのあまをうやまひたふとむ〈崇敬〉

みたりのあまをとりて氷田直と達等とに
さづけてきぬくひものをまつらしむ
佛殿をいへのひんかしのかたにつくりて弥勒の
いしのみかたをすゑまつりて三尼をゐやまひこ
ひて大會の設斎す。この時に達等ほとけ
の舎利を斎食の上にえたり。舎利を
もて馬子宿禰にたてまつる。馬子
のすくねこころみに舎利をもてくろかねの
質の中におきてくろかねのつちをふりて
うつに質と鎚とことことくくたけぬれとも
舎利はくたけやぶれず。又舎利を
みづに入るに舎利心のねがひのまゝに水にう
きしづみぬ。これによりて馬子のすく
禰池辺氷田司馬達等ほとけのみのりを
ふかく信じておこなひおこたらず。
馬子宿禰また石川の宅にほとけの
みあらかをつくる。仏法のはじめこれよ
りおこれり

十四年春二月つちのえ祢の朔みつのえとら
の日蘇我大臣馬子宿祢塔を大野丘の
北にたてゝ大会のをかみをまうけて達
等かえたるさきの舍利を塔の柱頭にをさ
む。かのとゐの日蘇我大臣やまひすト者
にとひたまふ。ト者こたへて父の時にた
せる仏神のたゝりなりとまうす。大臣
かれ子弟をつかはしてそのうらかたを
奏したてまつる。みことのりしてのたまはく

ト者のまうすことによりて父の神をいはひまつ
るべしとのたまふ。大臣みことのりをうけ
たまはりて石像をいやまひて寿
命をのべたまへとこふ。この時に
国に疫疾おこりて民みまかるもの
多し。三月ひのとのみの朔日物部弓削守屋大連と
中臣勝海大夫と奏してまうさく、何ゆ
ゑにか臣がまうすことをもちゐたまはざる
考天皇より陛下にいたるまでえやみ

またゑをおこらし國民すでにおほくしにたる蘓
我臣の佛法をおこなはんとしけれはおこなはれ
おこれるやみしものおほく滿ちていや
ちこなりよろしくほとけのことをとゞめむ
なし　三のえいぬの日物部弓削守屋大連
みづから寺にいたり胡床にあぐらしけ
おりかの塔をきりたふして火をはなちて焼く
并佛像と仏殿とをやきすてゝのこりて焼
あまりたるほとけのみかたをとりて難波の
堀江にすてさしむこの日雲なうして
風ふき雨ふる大連あまよそほひしたり
馬子宿禰とまうこひおこなへる法侶をせ
めてやつしはしむ
ち佐伯造御室於閣餞之まうこのおほいと伝へしてる子
宿禰のいらつめ善信等乃尼とよぶ
よりて馬子宿禰命をおそれずしてなきいさち
尼らをよびおこして御室に
さげくも田とつ地尼等の三衣とう

尼をいましめこらし海石榴市の亭にしもとう
ちうちき。天皇任那をたてんとおぼし
めし坂田耳子王を使として給ふこの時に
あたりて天皇と大連とにはかに瘡やみたまひ
ぬ故まからしむることをはたさず。橘豊日皇子に
みことのりしてのたまはく考天皇のみこと
のりにそむくことなく任那のまつり
ごとをはげみたまへとのたまふ。又瘡おこ
りて死ぬる者国にみちてそのかさをやむもの

いふ身やかれくだくるがごとしといひて
なきさいなみて死にけるこれ先にさかひて
みあらかをやき仏像をやぶりまつ
りしむくいなりといへり。
夏六月馬子宿禰病にかゝりて奏しまうさく臣が疾
病いまにいたるまでいえず三宝のちからを
かうぶらずはいえがたしとまうしければ
に馬子宿禰にみことのりしてなんぢひとり
仏法をおこなふべしとて

外人はやむしをえまひめことゝなし此三尼
とらへて馬子宿禰にわたし給ふ馬子宿禰
交くうらむかなしきよしなけいゝて
三尼はたゝみかへしたまひて精舎はくみて
入まいらせけりやしなふ
ある本にいはく物部弓削守屋の大連
大三輪逆君中臣勝海の連
ともにはかりて仏法をほろほさむとして塔
を焼き仏像をすてたまふと馬子

宿禰あらそふといへともきこえたまはす

秋八月きのとのうしの朔つちのとのゐの日
天皇病とりしこめ大殿にかくれましぬこの時
もかりのみやを広瀬にたてゝ馬子宿禰
大臣かたなをおひてしのひことたてまつる
物部弓削守屋大連あさわらひて咲ていはく
猟箭にあたれる雀鳥のことし
次に弓削守屋大連ておしわなゝきてしのひことたてまつる
しかれは馬子宿禰大臣わらひて

ゆくいて冬給とりあはれくしら速ぬよ
にて二乃后屋りやくらしく紙なきとり三輪
君逆隼人としにて殯庭にあい婦とうしむ
穴穂部皇子天下ととらんとたくはかりて
むにりまくことあはしにて云何ゆへぬり
死王庭にはへまつりにて生王の所にはへ
まいらさらん

国立公文書館
National Archives of Japan